

本院大臣・時平の邸宅

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

藤原時平は、関白太政大臣藤原基経の長男として生まれ、藤原氏の氏長者として若くして政権の首座に就きました。大宰府に菅原道真を左遷した裏工作の中心人物として、後世まで悪評が高いのですが、醍醐天皇の時代には左大臣として「延喜の治」を推進させるなど、評判とは対照的に政治的手腕の優れた人物だったようです。また、時平は「本院のおとど」とも呼ばれており、居住した邸宅は「本院」と称されていたことがわかっています。

「本院」の所在地は、『拾芥抄』東京図によれば左京一条二坊十二町にあったと記されており、現在の榎木町通の北側、堀川通の東側一帯に相当します。平安京では中御門大路の北、堀川小路の東一町を占めており、後には中御門大路を挟んだ南の敷地に高陽院が造営された、京内でも一等地にあたり



位置図

昭和62年試掘調査
平成16年発掘調査



平安時代の遺構（東から）

ます。『大鏡』には「本院」の有名な逸話として、醍醐天皇と時平が示し合わせて当時の華美・贅沢を戒めた話が載せられています。わざと美しい装束で参内する時平に醍醐天皇が退出を命じ、勅勅を被った時平は「本院」の門を固く閉ざして御簾の外にも出なかったというものです。このような左大臣時平邸である「本院」は、当時を代表する邸第であったと考えられます。

ところが、「本院」の実態については考古学的にはまったく謎といえます。昭和62年度に試掘調査を行ない、園池の一部とみられる泥土層を確認しています。この泥土層の時期は出土した土器から9世紀後半のものと考えられ、「本院」の中央部に園池が所在した可能性が高いことが知られるだけでした。

今回、平成16年2月から3月にかけてはじめて「本院」推定地の



「本院」の出土土器と白磁托

平安時代後期の井戸と出土遺物

発掘調査を実施しました。調査地は狭い範囲でしたが、平安時代中期の土器を多量に包含する落ち込みを検出し、「本院」で使用されていた土器群を良好に確認することができました。

出土した土器は非常に特殊なものが多く、当地域が普通の京内宅地とは異なる邸宅であったことを十分推測できるものでした。とくに、手づくねで製作された土師器と呼ばれる平安京で一般的な器はごく少なく、ロクロの回転を利用して丁寧に作られた椀や皿が多量に出土しています。同様の資料は、内裏や累代の後院である冷然院の調査でもまとまって出土しており、天皇やごく一部の高級貴族の邸宅で使用された特殊な土器群として認識できます。

また、緑釉陶器の椀や黒色土器

の硯などが出土しており、なかには中国からもたらされた白磁の「托」と呼ばれる器も見られます。托は、お茶などを入れた椀を受ける皿形の台で、白磁の托の出土は平安京でもめずらしいことです。これらの出土遺物は、「本院」での優雅な生活を窺わせる資料となっています。

時平は、延喜9年(909)に39才の若さで亡くなります。道真の怨霊に崇られたといわれるように、時平の子も若くして亡くなり、子孫は繁栄せず、「本院」の伝領も明らかではありません。撰関家としての藤原北家も、弟・忠平の系統に継承されていきました。

『中右記』によると、平安時代後期には当町の北西隅に白河法皇の寵臣である相模守藤原盛重の邸宅が所在したとされています。つ

まり、12世紀初めには「本院」が衰退し、一般貴族の邸宅として分割されていたこととなります。

発掘調査でも11世紀に掘られた、深さ3mを超える方形の井戸を発見しました。しかし、この井戸は「本院」に直接関わるものではなく、一町の敷地が分割された後の、平安時代後期の邸宅に造られたものと考えられます。出土遺物も高級貴族の邸宅の様相を示すものではなく、11世紀中ごろの京内で出土する、ごく一般的な土器ばかりでした。

「本院」地域の調査は始まったばかりであり、まだまだ謎は多く残されています。今後は狭い面積の調査でも継続して行なうことによって、「本院」の盛衰の実態を明らかにしていく必要があるでしょう。 網 伸也